ふくい

舞鶴市立福井小学校
令和4年4月27日発行
（本年度2号）

目指す子ども像
かしこく やさしく たくましく ふるさと大好き

「ありがとう」でつなぐ心と心…

温かい日差しが降り注ぎ、新学期を迎えた子どもたちも元気に4月の学校生活を頑張りました。前半は少し肌寒く感じる日も多かったですが、時折初夏を思わせる日もあり、最近は半袖で過ごす子どもの姿も見られます。先日は家庭訪問に引き続き、授業参観、PTA総会、学級懇談会とお世話になりました。昨年は、家庭訪問こそ実施できましたが、授業参観等は中止をしました。そのことを思えば、コロナ禍であっても、規模を縮小しながら予定通りの行事が実施できるのはうれしい限りです。しかし、最近の舞鶴市内（特に子ども）の感染状況は非常に心配です。週末からGWに入ります。今年は緊急事態宣言こそ出されていませんが、京都府の児童生徒の感染者累計では、その約90％が第6波での感染です。体調管理には十分注意し、感染防止対策も含めて規則正しく安全で楽しい連休になることを願っています。

総会前、PTA本部役員の皆様に、本年度のPTA活動開始に向けて活動方針や目標、年間行事計画等について相談していただきました。前もってスローガンや目標についてお考えいただいており、話し合いの中では、相手を思いやる心や感謝する心を持った子に育てたいという意見がたくさん聞かれました。「思いやりの心でつながる福井小」など思いのこもった案や「ありがとうの数だけ、人生は豊かになる」なんて素敵なフレーズもありました。最終的に「ありがとう」「思いやり」「素直な心」「つながり」などのキーワードをもとに、本年度スローガンが「育てよう思いやりの心と感謝の気持ち」に決まりました。子どもたちが感謝の気持ちを忘れず、思いやりのある優しい子に成長してほしいと願う保護者の気持ちが感じられるスローガンになりました。

「感謝」の大切さは、多くの人が口にします。そして「ありがとうは、魔法の言葉」などと言われ、様々な場面で取り上げられます。「ありがとう」は「有り難う（有ることが難しい）」と書き、始めは仏教の言葉として、めったにない奇跡（仏の慈悲）に対する感謝の言葉とされていました。それが、いろいろな解釈や用法を経て、徐々に一般的なお礼の言葉として使われ始め、江戸時代頃には庶民にも定着するようになったと言われています。

こんなお話があります。ある日、お釈迦様が弟子の阿難に尋ねました。「広い海に、百年に一度だけ海面に顔を出す目の見えない亀がいました。その広い海には、真ん中に小さな穴の開いた丸太の棒が浮いていて、波や風に揺られて東西南北あらゆる方向に流され漂っていました。百年に一度水面に顔を出すとき、盲目の亀が丸太の穴にピッタリと頭を入れることができると思いますか？」阿難は「そんなことはあり得ません。」と答えますが、釈迦は「絶対にあり得ないことですか？」と問い直します。そこで阿難は「何億年、何兆年という時間の中でなら、もしかするとうまくいくことがあるかも知れませんが、それはとても難しいことです。」と答えました。釈迦は「実は、私たちが生まれるという事は、この目の見えない亀が広い海に漂う丸太の小さな穴に頭を入れるよりも難しいこと（奇跡）なのです。とても有り難いことなのですよ。」と言ったそうです。

日常生活の中では些細な事でも「ありがとう」を言う場面は多いです。「めったにないこと」が語源ですが、人に何かをしてもらって「ありがとう」と言う機会は、たくさんありますが実はとても尊いことです。人が自分のために心を砕いて優しくしてくれることは、それが当たり前なのではありません。有り難いことだと思って生活することが大切だと思います。奇跡の瞬間が何度も自分に訪れると考えると、まさしく「ありがとう」の数だけ人生は豊かになっていきます。感謝されて嫌な気持ちになる人はいません。感謝されることで子どもは自信を持ち自己有用感を高めます。「ありがとう」がたくさん通い合う学校でありたいです。

【自衛隊から「南極の氷」…有り難う】

校長　波多野　暢　　教職員一同